

司馬遼太郎はどうか

横松和平太

湖の南—大津事件異聞

富岡多恵子の『湖の南』(2011年文庫本版)を最近読む機会があった。大津事件異聞という副題と書評に惹かれてのことだった。明治24(1891)年、来日中のロシア皇太子ニコライが警護巡查の津田三蔵に襲われ負傷した「大津事件」を描いた作品だ。滋賀県琵琶湖半の大津で起きた事件であり、当時は湖南事件とも呼称されたことからの題名のような。この本では、犯人の津田三蔵の人間像を近年発見された彼の書簡史料を解読することで語っているところが興味深かった。吉村昭『ニコライ遭難』(1993年)は読んだことがあったが、事件を題材にした文学作品は他にも数多くある。それらの作品では津田三蔵は凶行犯としてその動機や背景があまり深く描かれてはいない。又、事件の時代背景として明治維新からさほど経っていない近代化途上にあった国家の事件として描かれることが多い。強国ロシアとの国際関係、政治に対する司法権の独立をめぐる争い等の視点が中心となっているのが普通である。しかし『湖の南』では、津田三蔵という男が何故事件を起こすに至ったのか？その内面と背景を探っている。明治維新を13才で、20才で西南戦争に従軍という時代の変革期を体験した37才の青年没落士族の心象に迫っている。元来少し精神の変調をきたすところもあった男が、時代や生活のストレスから本人もよくわからないまま追い詰められた末の感情の激発ではなかったのか。単なる狂人の犯行などではない、との見方にうなづけるものがあった。いわゆる歴史小説ではなく、物語の語り手を巡っての謎めいた話の展開など鮮やかな構成、語り口にも感心させられた。

『坂の上の雲』にみる津田三蔵

この『湖の南』の中で、筆者は司馬遼太郎が『坂の上の雲』(1972年刊)でどう津田三蔵を捉えているかについて触れ、こう述べている。(以下、要約引用です)

一司馬遼太郎は、(中略)津田三蔵を「精神医学でいう狂人ではない。思想的狂人であろう。」といい、さらにつづけて「憂国的感情という、ときにもっとも危険な心情をうみやすい精神がかれにおいてはげしい。津田は素朴な攘夷主義の信者であった。さらに日本が欧州の大国とくにロシアから侵略をうけようとしているという、そういう危機意識で心をこがしていた。」としている。(中略)しかしはたして「思想的狂人」であったかどうか。「素朴な攘夷主義の信者」であったかどうか。同僚はもとより、肉親や親戚の者もみな口を揃えて変人一口数が極度に少く、他人と喋ることを好まない—とはいうが、政治向きの感心があったことは、だれもが認めていない。また、彼が見かけたロシア人の西南戦争碑周辺での行動やロシア皇太子が天皇への挨拶を後回しにしたことを無礼もしくは非礼だと思ったとの供述を、ただちに「素朴な攘夷主義の信者」とはいいがたいとしている。彼は武士だから「礼」に敏感だったのかもしれないが、西南戦争碑という自身の「青春の栄光」のシンボルが無礼に扱われたと感じたことが暴発へのひきがねになっただろうと。

司馬遼太郎の小説は『龍馬がゆく』(1966年刊)『坂の上の雲』(1972年刊)などなど大ベストセラー作品が多く国民的作家などとも言われる。私も若い頃から次から次へと読み漁ったものだった。彼の小説は独特の文体・語り口もあって抜群に面白かった。戦国時代ものから幕末・維新ものなど彼の作品によって歴史を読み、知る、楽しさも味わった気もした。しかし、口当たりの良さと饒舌さに何処となく胡散臭さも感じていた。

『湖の南』の中での、司馬遼太郎の大津事件と津田三蔵への言及への疑いはそのところをまさについていた。「思想的狂人」で「素朴な攘夷主義の信者」の津田三蔵が起こした事件であるとの言いぐさは、安易な極めつけでしかないのではと思えた。俗耳に入りやすくわかり易い言葉でのレットル貼りでは。ものの見方が如何にも浅いのでは?、と思えてきた。すると、司馬遼太郎の語ってきたことが気になり始めた。他にもありそうだ。そこで彼が幕末から明治の歴史的事件や人物をどう捉えていたのか幾つか取り上げて見たい。

生麦事件の現場

幕末期の代表的な攘夷事件として有名な「生麦事件」は、文久2年(1862)8月に起きた事件だ。キリンビール横浜工場のすぐ近くの東海道の記念碑が立っている。英国人リチャードソンが薩摩藩士により大名行列への非礼を咎められ生麦村で惨殺されたという。この事件を司馬遼太郎は『龍馬がゆく』風雲編の「生麦事件」という章で書いた。(以下引用)

—ところは、東海道の沿道生麦村。ここは江戸日本橋から六里の里程で、現在は横浜市鶴見区にある。当時は、近在の漁師の女房連が、蛤、たこ、いかなどを煮あげては、街道をゆく旅人に売りつけていただけの貧寒たる部落である。この「事件」がおこったために、おそらく、日本史のつづくかぎり、消し去られることのない地名になった。—

大げさな言い方も気になるが、それよりも生麦村の説明が気になる。如何にも昔の村のたたずまいを見てきたような言い方である。本当か?

吉村昭は司馬(1923年生)とほぼ同時代の1927(昭和2年)生まれの小説家。彼はどこまでも史実をしてドラマを語らせるところに特徴がある。無愛想なまでのカチツとした文体にも誠実さを感じる。彼に『史実を歩く』(2002年刊)というエッセイがある。執筆に当たっての調査の記録や後日談が興味深い。彼は膨大な資料にあたり、現場に足を運んで検証を積み重ね書いたことがよく分かる。このエッセイの中に、「生麦事件の調査」

(原文は1998年に『新潮』に連載)という章があった。氏の作品『生麦事件』(1998年刊)執筆にあたっての調査の顛末が報告されている。この中で最も興味深かったのは、事件の起きた場所を粘り強い調査により特定したことである。引用要約すればこうである。

—それだけに街道の両側に隙間なく家の並んでいる絵図に、思わず声をあげるほど驚いた。(中略)私は村が漁業を主とし、街道筋には耕地と農家があるだけだ、とと思っていた。しかし、(生麦事件参考館で)「慶応元年四月 生麦村往還軒並覚書上帳」という屋並図を見ると、あらゆる種類の商いをする店々が並び、所々に茶屋もある。質屋も多く、医師の家もある。私は認識を改めた。東海道は旅人の往来がしきりで、馬や籠が行き交い、品川宿と神奈川宿との間にある生麦村は、ひなびた村どころか賑わっていた村であるのを知ったの

だ。私が村を寒村であると思い込んでいたのは、F・ベアトが遺した「生麦事件の現場」写真であることに気がついた。その著名な写真は、ベアトが事件後撮影したもので、東海道の路上に二人の武士と小者らしい男が立っている。道の右側に太い松があり、その右手に耕地がひろがっていて、道沿いに粗末な農家が建っている。一

この写真の場所は実は生麦村のはずれであり、最初にリチャードソンが斬りつけられた場所ではなかった。ここまで逃げてきた彼がとどめを刺された地だと分かったとある。

吉村昭と司馬遼太郎の歴史を書く態度の違いがここにある。私だって写真は見ていたくらいだ、司馬遼太郎もおそらくベアトの写真を見ていたに違いない。事件の現場を検証することなく単なるイメージ、先入観だけで書いたのではなからうか。司馬遼太郎は膨大な資料を駆使しての実証性が売りだという。こうなると怪しいもので、資料は集めても深く検証しなかったのではないか。吉村昭が足で調査し確認した資料は司馬遼太郎が『龍馬がゆく』を執筆した当時も存在したのであり、ただ彼が確かめなかったただけにすぎないのでは。氏は資料の出展をほとんど記さないことでも知られている。ただ、吉村昭が史料を見た「生麦事件参考館」は1994年に個人が私設資料館として開設したものという。

天狗党の乱と武田耕雲齋

幕末の尊皇攘夷運動といえばその本山たる水戸藩の権力闘争に端を発した『天狗党の乱』がある。生麦事件の二年後元治元年(1864)に筑波山から敦賀まで諸藩や幕府軍と戦いながら行軍し、列島を騒がせた事件だ。頭領に担がれたのは水戸藩家老武田耕雲齋、首謀者は藤田小四郎という国学者藤田東湖の息子だった。彼らの目的は天皇のもと幕府に対し攘夷の実行を迫るというものであり、水戸藩の縁故者にして幕府の実力者である一橋慶喜にその志を訴えんとしたものであったという。討幕派ではなく敬幕派であった。結局は慶喜に裏切られ、投降者776名の内352名が賊徒として刑死させられた。皮肉なことにこの事件で幕府の弱体化が加速した。昭和維新をスローガンにして軍事クーデターを起こし、天皇に裏切られ(彼らの思い込みとは違っ)て挫折した後の2・26事件の原型のようなところがあるとも。司馬遼太郎は『龍馬がゆく』の希望編でこう描いている。(引用)

一水戸藩の家老で武田耕雲齋という人物がいた。過激な尊皇攘夷家で、のち(元治元年春)浪士たちにかつがれ、筑波山で挙兵し、京にのぼって天子を擁しようとしたが、幕府がまだ強勢であったため事敗れて捕われ、刑死した。一この章の後段では、幕府が加賀藩を頼んで投降してきた一味に対する過酷な扱いと処刑に触れ「史上まれな大虐殺とっていい。」「この残虐極まる徳川幕府をこのままにしておいてよいものか、どうか」一と龍馬につぶやかせている。この描き方では武田耕雲齋という人がまるで生きていないと私には思える。彼の人格や思想が浮かんでこない。例によって「史上まれな大虐殺」とか大仰な表現も鼻につく。通り一辺の薄っぺらい叙述でしかなく、慶喜の存在に触れてもいない。

「天狗党の乱」は吉村昭が『天狗争乱』(1993年刊)で史実を追って事件を描き、最近では伊東潤の『義烈千秋』(2011年刊)がある。だが、私にとって面白かったのは山田風太郎の『魔群の通過 天狗党叙事詩』(1978年刊)だ。この小説は天狗党の生残りの武田耕雲齋の四男なる架空の人物が30年後に往時を懐古しながら事件と人物を描く、という趣向が意表

を突く。虚構であるからこそかえってリアルに歴史に迫ることもある。当時生きていたならこうであったであろうと時代の空気を伝え、登場人物のキャラが造形され個性的に躍動している。山田風太郎も1922年生まれでやはりほぼ同時代の小説家だ。伝奇小説や忍法小説が有名であるが、幕末から明治の時代をテーマにした作品にも秀れたものがある。

『警視庁草紙』(1975年刊)に始まる一連の明治開化小説シリーズだ。『ラスプーチンが来た』(1984)では、大津事件も津田三蔵も登場する。但し、事件を起こしたのは彼の双子の弟、七蔵という設定である。事件の動機も奇想天外である。史実と史実の間を独創的な設定でつないでいる。世に、司馬遼太郎の小嘘・山田風太郎の大嘘という言葉があると云う。司馬遼太郎は「こうであろう」と書き、山田風太郎は「こうであってもいいはずだ」と書いたと言う。言い得て妙なところがある。

司馬遼太郎賞

史実に迫り史実をして語らしめるという吉村昭には及ばず、山田風太郎のような虚構を駆使してリアルさを感じさせる冴えもない。まして富岡多恵子のような明治維新の近代化という歴史の背後にあった時代の狂気をえぐる深さもない。と、私には思えた。が何と行っても戦後を代表する国民的作家である。司馬遼太郎の良さは一体どこにあるのだろうか？ 彼を評価する文化人は確かに多いのだ。野球界では長嶋茂雄、歌謡界なら美空ひばりと言ったところか。彼に対する評価の声にも耳を傾けてみなければならない。

司馬遼太郎(1996年没)に因んで1998年より司馬遼太郎賞が創設されている。第一回より第八回までは主に人物を対象に、それ以降は小説・評論といった作品が対象になっている。昨年12月に第15回の司馬遼太郎賞に選定されたのが辻原登(1945年生)の『韃靼の馬』だった。日経新聞の朝刊に連載され2011年10月に刊行された作品だ。連載中は私も毎日楽しませて貰ったものだ。文句なく傑作だと思う。受賞を伝える記事にはこうあった。

一選考では朝鮮通信使の道筋を鮮やかによみがえらせるなど、国家、民族を超えた人の心の結びつきを躍動する文体で描き出したことが評価された。受賞決定の会見で司馬遼太郎との関わりを問われると「新聞小説という形式一つをとっても、司馬さんの影と響きの中で自分は仕事をしている、と感じている」。さらに「作品を構想するとき、時間と空間の組み立てを司馬さんならどうしたのか、と意識していた。この小説も司馬さんの『韃靼疾風録』という作品がなければ生まれなかった」と笑顔で語った。一(12/15日経新聞夕刊)

『韃靼疾風録』(1987年刊)は司馬遼太郎の最後の小説。これ以降彼はエッセイ、評論しか書かなくなった。“小説を書かないのは義務を果たしたからだ、”と本人は云うが。

第一回の受賞者は立花隆。彼は受賞記念の講演で一司馬さんは「司馬遷にはるかに及ばない」のではなくて、ある意味で「司馬遷をはるかに抜いた」一と発言した。リップサービスも甚だしいのでは。第二回は女司馬遼太郎とも言われる塩野七生。カエサルとかチェザレ・ボルジアとか、できる男、英雄が大好きなおばさん作家だ。関川夏央も受賞者で、『坂の上の雲と日本人』(2006年刊)という本も書いている。団塊生まれの司馬ファンだ。

ついでながら

田辺聖子は司馬遼太郎への弔辞で「司馬さんのご業績の第一は、私たち日本人に、勇気と希望と夢と、そしてプライドを、思い出させて下さったことだと、私は思っています。敗戦このかた日本は、ある傾向の傾向のイデオロギーや思想の権力のもとに、かたよった認識を強いられて、歴史や伝統を否定する風潮がみちていました。...人々は祖国に落胆し、卑下してしまったのです。...昭和30年代、司馬さんの歴史小説はそういう日本社会に躍り出ました。...」と述べた。(『文藝春秋』2001年2月号「弔辞」)これが代表的な評価のようだという。弔辞だから当然なのだが司馬惚れはここに極まっている。

司馬遼太郎の代表的な小説が書かれた時期は戦後の高度成長時代に重なっている。敗戦によって失われたプライドを回復させ、ひたすらジャパンアズナンバーワンへと走った時代であった。時代をリードし支えた政治家、経営者、管理者達からフツのサラリーマンまでに愛読されたのは、彼らへの応援歌であり、自信回復剤であり精神安定剤だったからのような。また、司馬遼太郎が好きと評価されるのは何と言っても「面白い、からだろう。英雄や天才達がドラマチックに活躍する展開、巧みな人物造詣には定評がある。

豊富な資料や文献を駆使した執筆態度も読者を惹きつけたという。司馬遼太郎賞の選考委員であった井上ひさしは『本の運命』(1997年刊)の中で「神田から本が消える、という逸話を紹介している。「古本屋さんとのつき合いということでは、亡くなられた司馬遼太郎さんや松本清張さんは、ケタ違いでしたね。...この前まであったはずの本が、ポカッと無くなって空いている。「どうしたんですか」と聞くと、「いま司馬さんのところへ行ってます、というんですね。司馬さんが「こういう本はないか、とおっしゃると、神田中の本屋がみんな協力して集めて、段ボールに詰めて大阪へ送る。...」この話は伝説ともなり、司馬遼太郎の話は史実を正確に伝えているだろうというイメージを造った。

さらに彼の語り口もまた人気があるという。「ついでながら」「余談ながら」と言ったつぶやき・随想・余談の挟み込み・自注は読者サービスとして巧みだ。安岡章太郎はこれを評して「大雑把に言ってしまうと、大衆小説を崩して、全部エッセーにしちゃったのは司馬遼太郎ですよ。彼の司馬節、彼の講演調が大衆小説の文体を壊した。小説じゃなくて随筆の形で、歴史そのものを語ってもらったほうがおもしろいとなった。」(『論争』東洋経済1997年3月号)と言った。文体の特徴といえば「この人物の面白さは」「この時代の奇妙さは」「この国家の不思議さは」等々もあげられる。いかにも耳に心地よいのである。先述の『弔辞』の中では、「自注がそのまま小説の血肉となり、主人公の独白や思惑とひびき合い、...もはや従来の時代小説、歴史小説の枠をこえ、小説と評論の垣根もとりはずされていました。自注によって小説は奔馬のように躍動しました。...」とまで言っている。ここまで持ち上げられては泉下の司馬遼太郎も苦笑しているのではなからうか。

などなど、国民的作家司馬遼太郎への讃仰は枚挙にいとまが無い程だ。この文章のはじめの部分で私がとりあげた異議らしきものは、いささか瑣末なことだったのかも知れないと思えてきた。しかし、世に司馬遼太郎に対しては好意的な見方ばかりではないのもま

た事実だ。あの吉村昭は司馬遼太郎賞を辞退したという、当然だろう。贈賞側の見識を疑ってしまう。司馬遼太郎への異論・批難は実に多い。安土・桃山・戦国時代ものとはともかく幕末・明治時代にかけての小説に対して多く見られる。作品としては『龍馬がゆく』『坂の上の雲』『翔ぶが如く』(1976年刊)などに対してである。今回幾冊か関連本を読んでみて納得できるものはいくつもあった。司馬遼太郎の残した小説・評論・講演などは実に膨大なものがある。群盲象をなでるようなものでしかないと思う。だがめげずにそれらの中から司馬遼太郎の小説はどうなのか？私なりに感じたことを纏めて見たい。

マーケティングの大家

あまたあった司馬遼太郎批判のなかで、特に目をひいたのは次の一節だった。

東急エージェンシーの元社長新井喜美夫はコラムの中で、司馬を「その取り上げる人物、書き方に問題がある」とし、「ファンの少ないマイナーな人物は取り上げない。司馬遼太郎はマーケティングの大家であっても真の作家とはいえない」「こう書けばこう喜ぶということを、意図的に、あるいは潜在的に間違えて書く」と評した。(『ニューリーダー』1994年10月号)マーケティングとは顧客の創造であり、創造とは顧客の好み(潜在か顕在かを問わず)に合わせて、商品やサービスを提供することである。司馬が好んで書いた人物は昔から大衆が好んだ英雄豪傑、ヒーローが多い。江戸の昔から大衆には読本や講談があり、戦前にも丹下左膳や鞍馬天狗が活躍する小説、吉川英治の『宮本武蔵』などがあった。読者・大衆はこれらを面白く読み、元気を出してきたのだ。あたかも自分がヒーローになったかのような気分になり、日々の辛さや憂さを晴らしてきた。司馬の歴史小説もまたそうだ。好漢たちをカッコよく書かせたら天下一品だろう。人物像が魅力的である。

“歴史小説、と”歴史、とは危うい関係にあるようだ。元々明確な歴史的事実即ち史実は少ないものだ。歴史小説家は史実と史実を想像による力でフィクションで埋め、歴史家は史実と史実の間を仮説にもとづく論理的な推論で埋めていく。フィクションは許されるものであるが、史実を歪めたり、無視したり、ありもしないことを捏造するのは許されない。その史実の存在ですら信憑性に疑いがあり、いわゆる史料批判(検証)が欠かせないもの。司馬遼太郎は「歴史小説というのは、読んでくれる方に楽しみの娯楽を与えるもの」といい、小説はフィクションであるとしている。(「佐高信・色川大吉対談」より 1998年) その一方で、自らの実証性を『坂の上の雲』第四巻の「あとがき」で、次のように書いている。「この作品は、小説であるかどうか、じつに疑わしい。ひとつは事実拘束されることが百パーセントにちかいかからであり、いまひとつは、この作品の書き手—私のことだ—はどうしても小説にならない主題をえらんでしまっている。」読者をして事実を正確に伝えているものだと、思い込ませる書き方である。司馬には、この手のよく言えば優良誤認を誘うというか韜晦の手口が多いようだ。広告の世界では虚実皮膜の間を狙ったコピーや映像が多い。あたかも自分の夢や憧れが、簡単に手に入るよう思い込ませるのだ。それが巧みなのがマーケティング上手とされる。司馬遼太郎はやはりマーケティングの大家だ。

メディアミックスを駆使するのもマーケティングの手法だ。司馬は小説を書かなくなった後は、『街道をゆく』(1999年～)などの歴史紀行、歴史随想、広範な知識人達との対談、あるいは講演へと活動の場を移す。活字だけではなくてテレビ・ラジオへの出演、

そして原作本はテレビドラマ・ドキュメント・映画・演劇などで幾度となく露出が続いている。ひとひねり効かせた視点と語り口はサービスの差別化という、これまたマーケティングの定石にかなっている。本のタイトルのネーミングも抜群だ。『燃えよ剣』『国盗り物語』とか実にうまい。秀れた関西商人ともいうべきだろう。でも“真の作家ではない、と斬り捨てられている。なぜか。そこが問題だ。

幕末・維新から戦前昭和の歴史

話を面白くすることの達人だった司馬遼太郎は、史実とフィクションを巧みに操った。該博な知識と豊富な資料と調査活動でその実証性が売りだが、『坂の上の雲』についてはそれを疑わせる論評が多いようだ。例えば、『「坂の上の雲」に隠された歴史の真実』(福井雄三 2004年)、『異評 司馬遼太郎』(岩倉博 2006年)、等々である。これらの著書では、日露戦争の旅順攻略戦等の描き方について資料の誤読、過剰表現、軍事知識の浅さ等を指摘している。評論家の福田恆存も、評論「乃木将軍と旅順攻略戦」(『中央公論』1970年12月臨時増刊号)で次のように書いている。

一近頃、小説の形を借りた歴史讀物が流行し、それが俗受けしている様だが、それらはすべて今日の目から見た結果論であるばかりでなく、善悪黑白を一方的に断定しているものが多い。が、これほど危険なことは無い。歴史家が最も自戒せねばならぬ事は過去に対する現在の優位である。(中略)勿論、読者がさういふものを一種の娯楽として読める程度に成熟していれば問題は無い。戦後の歴史軽視の結果、人々は「正史」を知らず、また歴史の読み方も知らない。その反動として歴史讀物や歴史を扱ったテレビ映画に縋り付きその渴を癒そうとしている。歴史家のみならず、歴史小説家もその点をよほど慎重に考へねばならぬであろう。一司馬遼太郎は、解っていないながら講釈師さながらに商売にしたのだろう。

実証性への疑いもさることながら、如何なる考えによって彼が書いたのかが問われてもいる。ことに幕末・維新から明治・戦前昭和に至る歴史への見方がことに気になる。

元経済官僚で学者にして評論家の榊原英資はその著書『龍馬伝説の虚実』(2010年刊)で一司馬は『龍馬がゆく』『坂の上の雲』の後に『「明治」という国家』(1989年刊)を書き、この時代を「清廉でリアリズムを持っていた」素晴らしい時期だったとし、昭和に入ってから「統帥権」が拡大解釈され、日本がおかしくなってしまったと...日露戦争を賛美し、第二次世界大戦を非難しているが、果たして妥当なのか。明治維新から第二次世界大戦までの日本の歴史は連続したものであり、どこかに断絶があったと考えるのは無理があります。一とし、彼の見方によれば、明治維新から戦前の昭和に至る時代は、天皇制イデオロギーのもとで富国強兵策のための西欧化・近代化であった。たまたま日露戦争には勝ち、第二次世界大戦は敗北しただけのことであり、二つの戦争に本質的な違いがそんなにあったのか。一との指摘している。

明るい「明治という国家」をつくった英雄として“龍馬像”を創り、逆に「暗い昭和」をつくった犯人としてことさら陸軍官僚を強調したようだ。歴史に合わせて小説を書いたのではなく、都合の悪いことには触れず、小説に合わせて歴史をうまく利用したのだ。

負け戦でプライドを傷けられた日本人に、「勝ち戦もあったんだよ、誇りを持ちなさい、今度は経済戦争で勝てばよい」と戦後のリーダーや庶民にエールをおくったのだ。

しかし、ここには日本の近代化に対しての深い洞察はなく、むしろ罪づくりの面がある。

『雲の先の修羅』(2009年刊)で半沢英一は「知性や教養がまったくないとはいえない多くの日本人を、現実から目をそむけさせる」と『坂の上の雲』を批判している。同感だ。

精神主義への無理解

司馬遼太郎は好意を持つ人物をとりあげ、主人公に対する共感を広げてゆく。しかし、彼には嫌いな、あるいは苦手なタイプの人物も登場する。立花隆は一司馬さんが攻撃する対象は、リアリズムが欠如した人間ですね。イデオロギーに突き動かされて盲目になった連中と、精神主義を強調しすぎて精神で現実すら克服できると思込んだ連中ですね。その両者があのひどい時代をつくったんだということを、彼は繰り返し言っていた。(司馬遼太郎賞受賞記念講演)と述べた。『龍馬がゆく』の余談にこうある。「宗教的攘夷論の狂信的な流れは昭和になって、昭和維新を信ずる妄想グループにひきつがれ、ついに大東亜戦争をひきおこして、国を惨憺たる荒廃におとし入れた。」ちと荒っぽい見方では？

合理的な思考や技術こそが、戦後の経済的な繁栄をもたらしたのだと肯定し、精神主義を全否定している。江戸時代から近代へとつながっている代表的な日本の思想として陽明学があるという。「知ツテ行ハザルハ未ダコレ知ラザルナリ」という知行合一説が有名だ。陽明学を拠りどころとした人物や事件を挙げることは容易である。大塩平八郎、佐久間象山、吉田松陰、乃木希典、といった人々があまり好きでなく人物描写も精彩を欠くことが多い。忠臣蔵の世界には近寄らず、1960年代の学生運動には冷淡。三島由紀夫の事件に対しては、異常な狂気の死に近いとしか見ていない。彼は“精神主義的思想”は“虚構”としか理解できず、彼の好きな合理主義的精神もまた“思想”のひとつだとは思っていないようだ。“精神主義的思想”をただ否定するだけでは時代の底流は見えてはこないはずだ。

合理主義的精神で西欧化を急ぎ富国強兵に邁進した近代化だけが、果たして日本の取るべき道だったのか、列強帝国主義に伍してのやむなき選択だったのか。司馬遼太郎はここを深く考えることなく、尊皇攘夷思想が昭和陸軍の軍部の暴走につながったとしか理解しない。なぜこうした思想が生まれ、人々を動かしたのか、近代化にとまどい苦悩する民衆のうめき声や悩みという時代の背景にあるものへの視線がないようだ。

『維新の夢』(2011年刊 渡辺京二)の西郷隆盛論が出色だ。幕末期の江戸社会の民衆は幸福な社会秩序、安定した生活、豊かな文化のもとにあったのであり、性急な改革の必然性はなかったという。権力の腐敗も伴った中央集権国家に疑いを持ち、西欧直輸入の明治政府による近代国家路線とは異なるもう一つの道を探そうとした人物であると。西欧という外圧により、無理やり近代化に巻き込まれた、民衆の違和感にも共感を持った人であると。

北一輝、2・26事件に対する視点にも深いものがある。渡辺京二は、アジアにとっての近代とは何かという本質的な問題を提起してきた人である。彼から見れば司馬はこうなる

同著収録の「『翔ぶが如く』雑感」(1979年)では、一「私は司馬という作家から小説の提供を欲するもので、歴史に関する講釈を聞きたいのではない」、「小説として見れば、スリルである。」「この人は机上、戦略戦術を論ずる。小説家はそういうサービスもせねばならぬのを承知しないではないが、この人はあくまで本気のようなのである。正気の史家にできることではない。しかし以上一端を述べたような疑義はこれは小説なのだ、小説、小説と念仏を称えておけば強いて申し立てるにも及ばぬことである。」と手厳しい。

乃木將軍の毀譽褒貶

戦前は高潔な軍人として評価され、東郷さんと共に軍神として神社に祀られたのが乃木希典だった。もっとも、彼が生きていた同時代の人からは無能だ、馬鹿だと悪口も云われたらしい。だが明治天皇への殉死をメディアがこれを武士道精神だと賛美すると、世評が一変し軍神だとなった。日露戦争での戦い方への非難も止み、敵将への惻隱の情、愛敵の持ち主とされた。この見方を更にひっくり返したのが司馬遼太郎と言ってよいかも。『坂の上の雲』では、日露戦争の旅順攻略戦の乃木を無能な軍人として描いた。児玉源太郎や秋山兄弟などのまるで引き立て役としてその無能ぶりを強調した。詩人乃木希典とは認めながらも、軍神から愚将に引きずり下ろした。好きになれない人物には冷淡なのだ。

司馬びいきの関川夏央は一「司馬遼太郎は文学の力を信じて、流行思潮に敢えて異を立てる、たぐいまれな男気を持つ作家でした。」一とヨイショしている。当然のことながらこれに異をとる人もいる。

『名将 乃木希典一司馬遼太郎の誤りを正す一』(桑原 嶽 1996年)では、徹底的に司馬遼太郎に反論している。詳細は省きたいが、事実誤認や偏見が多いことを逐一取り上げ意図的な中傷であるとさえ断じている。この著者は乃木希典を顕彰する会の人物なのだから批判するのも尤もだろう。しかし、これまで1900万部も売れた(読賣新聞2010年元日朝刊広告欄)という影響力には抗することは難しいのかも。かつては乃木將軍の手紙などの骨董品はお宝価値があったらしいが、今や二束三文であるらしい。司馬遼太郎や恐るべし。

文豪“森鷗外、は晩年いわゆる歴史小説を書いた。『阿部一族』『興津弥五右衛門の遺書』など評価が高い。しかし『渋江抽斎』などは毎日新聞に連載された当時は全く人気がなく“高等講談、と批判の対象とされたという。夏目漱石は「昔の歴史を扱ったものを、世間では高等講談などと云って悪く云うが、私は面白いものだと考える。高等講談などと云つて、一笑に附すべきものではない。尤も高等の文字がついて居るから、必ずしも冷笑の意味ではないと云うなら、それでもよい。(抄出)」(大正四年、「大阪朝日新聞」談話)と、発言しているが、つまり大衆からは支持されなかったということだ。

森鷗外の歴史小説は“高等講談、として低くしか見られなかったが、国民的作家“司馬遼太郎、の歴史小説は大ベストセラーとなった。これをどう見るかである。私には司馬遼太郎の小説は、その語り口の巧みさは大いに認めるものの、ほとんど講釈師による“高等講談、と思えてきた。単なる娯楽作品、大衆小説であるとするなら、それはそれでよいのだが。周知のことなら、何もムキになることはないのだが。 (了)

